

キャプテンストライダム活動休止 メンバー3人とのキャプスト談義

キャプテンストライダム [※1] が2/3 [※2] にオフィシャルHPにて活動休止を発表。デビュー前から時代の空気を読んでいるのか読んでいないのかよくわからないキテレツかつシュールかつポップかつ泥臭いオーラを全身から放ち続けてきた3人は、結成から11年目にマイクとピックとスティックをひとまず置くこととなった。

そして来る4/4日にリリースする歴史アルバム『ベストロリー』でキャプストはその活動を休止するわけだが、同作のブックレットに掲載されるライナーノーツを不肖ながら私・JUNGLE★LIFE編集部山中が書かせていただくこととなった。そのライナーノーツを寄稿するにあたり、メンバーと話がしたいことをレコード会社のスタッフ及び担当ディレクターに告げ、メンバー3人との会食が実現 [※3]。今回のインタビューは、そのときにたまたま回っていた取材用テープに録音されていた会話である。

キャプテンストライダム歴史アルバム『ベストロリー』



SMAR
【初回盤】
AICL-2112/2113
¥3,500 (税込)
【通常盤】
AICL-2114
¥2,800 (税込)
2010.4.14 Release

- 【Disc-1】
1. マウンテン・ア・ゴゴロー
 2. 肉屋の狼
 3. サンドバッグの夜
 4. 流星オールナイト
 5. キミトベ
 6. 恋しみのシミかな
 7. 風船ガム
 8. 恋するアレミシグ
 9. LOVE STAR
 10. ケムリマン
 11. わが妻まチャック
 12. 人間ナニモノ?
 13. CHERRY BOY
 14. ブギーナイト・フィーバー
 15. 東京ジャンボディスコ2010 ※未発表曲
 16. 泣いていいのさ ※未発表曲

- 【Disc-2】 ※初回盤のみ
1. ねずみのブルース
 2. ノーテンアフラワ
 3. ぼとの祭り
 4. 夏のかげら
 5. 北原原人 (SHINJUKU JAM LIVE)
 6. おぼけナイターのテーマ (SHINJUKU JAM LIVE)
 7. ヤルキレス (Live at SHIBUYA-AX)
 8. 舟 (Live at SHIMOKITA ZAWA CLUB OUE 2004. 12. 04)
 9. 大の志士 (Live at LIQUIDROOM 2006. 03. 23)
 10. GOOD HARVEST (Live at SHIBUKO 2007. 03. 18)
 11. SURRENDER
 12. ベケベケ
 13. SHOOT TO THRILL
 14. Shangri-La
 15. ニートな午後3時 ※未発表曲
 16. 深夜高速

キャプテンストライダム

なる？」みたいなことも考えましたけど、でも戻って同じことをやってきたらどうかって。もちろん活動休止は良いことではないと思うんですけど…。

梅田：あ、どうも。【※8】

菊住：だから活動休止に関しては、自分でも「これが原因だった」とかはよくわからないんです。で、俺の個人的なイメージなんですけど、キャプテンストライダムは何かやるためにひたすら積み上げていくバンドではないかと思っていて。

●あ、そうなんです。

菊住：うん。この3人が集まってバーン！と音を出したときの「おおっ！」っていうかよさと

が楽しさがいいから俺は今までやってきて。永友や梅田の作ってきた曲を合わせて「おおっ！」っていう感動があり続けて今に至り、その感動を自分たちで生み出せない状態になってきたから活動休止を決めたっていう感じ。3人が全員同じことを思ってるかどうかはわからないけど、俺はそう思ってるんです。

梅田：いつかまたこの3人でめっちゃやりたくなったときにやるのがいいんじゃないかな。そんな感じ。その時は絶対興奮するだろうなって。

●批判的な意見は無かったんですか？

永友：いや、もちろんありましたよ。まずはウチの親からありました。

INTERVIEW #2 キャプストのライブを振り返ってみた

「ああ、やっぱりこの3人はバンドなんだ」ってすごく実感して。そのときのことはよく覚えてます」

●印象に残ってるライブはありますか？

菊住：俺は東京キネマ倶楽部（全国ワンマンライブツアー「CTSR DISCO JOURNEY SUMMER」ファイナル：09/7/11）と「明日に向かって踊れ！」ツアーのときの岡山PEPPERLAND（ツアー「明日に向かって踊れ！」08/9/21）ですぞ。

ディレクター：岡山は永友さんの声が全然出なかったときのライブです。

永友：そうそう。

梅田：あれはすごく燃えた。

永友：ハブニングがあったときのライブって印象に残ってることが多いんですよ。岡山は僕の声が全然出なくなってる、特に後半はまったく出てなくて。でもお客さんが一緒に歌ってくれたりして。

●それは嬉しいな。

永友：梅田と守代司だったり、サポートギターの横チン【※9】が補ってくれて。プロとしてはいいライブでは全然なかったんだけど、でも来てくれた人に何かを残せたという意味では僕もすごく印象に残ってます。あれは嬉しかったし、音楽をやってる意味を自分の中ですごく感じる事ができた。

●なるほど。

永友：大阪野音での「NEW BREEZE 2006」（06/4/15）のときも、俺らのライブは「キミトベ」が1曲目だったんですけど、すごく雨が降っててお客さんが凍えてて。「みんなの身体を動かすにはどうしたらいいかな？」と考えて、西城秀樹の「YOUNG MAN」みたいな感じで「Y・A・O・Nコール」をやらうと決めて。でもメンバーには言わなかったんですよ。で、ぶっつけ本番でやったらみんなついて来てくれたんですよ。梅田も守代司も横チンも。

●はい。

永友：ちゃんと「キミトベ」に繋ぐことができて。そこはもう賭けでしかなかったけど、一瞬で主旨を理解してくれて「ああ、やっぱりこの3人はバンドなんだ」ってすごく実感して。あのときのことはよく覚えてますね。

スタッフ：予定調和じゃないのが「ライブ」って感じだった。

永友：そうそう。事前に言っちゃうと予定調和になっちゃうから、敢えて言わなかったんですよ。まあ間違えて「Y・O・A・N コールになっちゃったんだけど（笑）。

●アハハ（笑）。

●あ、そんな近ところから。

永友：もちろん事前に「そうなるかもしれない」とは言ってますし、でも「どうしてくれるんだ？近所の人に何て言えばいいんだ？」って。

一同：（爆笑）。

●ところで活動休止ライブはしないんですよね？

永友：しないです。活動休止を決めた以上、やってもメモリアルなライブになるだけだし。「活動休止ライブ」って、ライブじゃない気がするんですよ。ある意味アンバーサリー的だし、泣いたりとかイヤなんです。来てくれた人が笑って帰ってくるライブを僕たちは目指してやってきたから。

●そっか。そうですね。

永友：やっぱり良くなかったライブも含めて「これが上でこれが下だ」っていうのは俺らの満足感がしか決められないんですよ。いくら自分が「上手く歌えたな」と思ったライブでも、お客さんが全然喜んでくれないまま帰ったとしたらそれは全然意味が無いし、もちろんその逆もあるし。

菊住：振り返ってみると、初期の頃のライブは印象に残ってるモノが多いですね。俺が加入して初めてやった宇都宮ハードロックハウスのライブ【※10】とか。

永友：あの時も俺の声が出てなかったよね【※11】。

菊住：そうそう。ビデオ観たらあまりにも永友の声が出てなくて、ライブ中に俺がウケてるどころまで映って。あとは同じく宇都宮ハードロックハウスでゴールエースに出て貰った「おぼけナイター」（04/4/12）とか。「おぼけナイターのテ」を初披露した日なんですけど。

梅田：ああ〜。

菊住：自分たち企画のイベントでおもしろいことができたって実感できた日なんですよね。

●ところで後から色々と聞になりましたけど、渋谷公会堂の「BIG BAN」（07/3/18）のとき、結局永友くんは泣いてたんですか？

永友：それはご想像にお任せしますよ（ニヤリ）。

●なんか強立つ。

永友：真相は墓場まで持っています。

3人じゃないとキャプテンストライダムの曲はできない」って。

●珍しいですよ、ここまでストレートな曲。

永友：そうですね。歌詞にしても曲調にしてもストレートだし、レコーディングした音も…初めてだと思うけど…コーラスもダビングも無しで。3人の音しか入ってない。

●うん。

永友：最後って言っても最後のつもりはないけど、3人で「僕たちはこういう音です」というのをいっぱいシンプルに出せる曲にしたかったんですよ。「か

っこいいよね」とか「凝ってるよね」という曲じゃなくて、単純に「いい曲だね」という曲を未発表の中から選んだんです。迷いはなかった。

梅田：うん。迷わなかったよね。

菊住：みんなの意見が一致してた。

●なるほど。

梅田：さっき「こういう曲は珍しい」と言われまして、自分の中ではしっかり覚えてるんですよ。

●いや、トリッキーな意味での「珍しい」というわけじゃなくて、歌っている内容も本当に飾ってないと感じたし、曲調もストレートだし。

梅田：ああ〜。

●キャストはカラフルでエンターテインメント的な魅力もあるけど、個人的にはあまり悪いイメージを通ってない曲…個性剥き出しの気持ち悪い曲だったり、「泣いていいのさ」みたいなストレートな曲が好きっていうか、そういうところがグッとくるんです。それは曲もライブも同じで。

永友：「泣いていいのさ」は色んな経験をを経て素直に書けたっていう手応えがあって。

●ふむふむ。

永友：それはたぶんNYに行ったこと【※13】も

関係してると思うんです。Steve Jordanとかとコミュニケーションを取るときに、「本音でストレートに言わないとやっぱり伝わらないんだ」というのがすごくわかって。逆に言えば、言いたいことってすごく簡単に言うことなんですよね。英語とか全然しゃべれないんですけど、それでも伝えようと思ったらシンプルな言葉で伝えるんだなって。そういうことをNYで感じたからこそ、「泣いていいのさ」みたいな詞が書けたと思うんですよ。

●永友くんらしいなあ。

永友：たぶんあの歌詞は色んな経験を経てないと書けなかったなって今から振り返ると思います。

●永友くんはあまり自分の気持ちを表に出すようなタイプじゃないかと思って、だからこそ「泣いていいのさ」の歌詞から永友さんの「素」が見えた気がして。変な感想ですけど、嬉しかったんですよ。

永友：うん。でもそういう曲なんだろうなって。キャプテンストライダムのファンに向けてエンターテインメント全開の曲を「こういう曲を録りましたよ」って最後に出すよりも、もっと直球で伝

INTERVIEW #4 菊住守代司、最後にバンドを語った

「生モノな感じがいい」

菊住：活動休止を発表して20日ほど経ったから若干客観的にもなってる、自分たちに限らずやっぱりバンドっていいなと思えました。「おぼけナイター」でおもしろいのか？」って考えてたんで

すけど、やっぱり「ダメだからいい」というところがあるかな。こんな言い方してるかわかんないけど【※15】。

●バンドは人間臭いんですよ。

読者と地球に優しく最後までキャストに手厳しいキャストに注釈

※1：キャプテンストライダム：キャスト、キャプテン、ライダム、キム、CTSRなど、ファンのみんなは本当に統一感なく略す。本誌で1度「キでいい」と書いたがまったく浸透しなかった。

※2：2月3日は節分の日：キャストは節分の日に何かが起こる。

※3：2010年2月下旬のこと。

※4：そりゃそうだ。

※5：梅田は父親の涙を未だかつて1度も見たことがないらしい。

※6：シングル『プギーナイト・フィーバー』：09年5月にリリースした11枚目のシングル。キーワードは「ディスコ」。

※7：生ビールひとつください：取材中に回っていたテープには、永友がいいことを言っているときに梅田が生ビールをおかわりした瞬間も克明に記録されていた。ファンの皆さんは既にご存知のことと思うが、梅田は空気が読めない行動を取る男なのだ。

※8：どうも：店員が梅田の生ビールを運んできた瞬間。菊住も被害に見舞われた。

※9：横チン：メンバーより年下&サポートなのにステージではダイナミックなプレイで魅せるギタリスト。

※10：2001年春に宇都宮ハードロックハウスで行われたライブ。「マウンテン・ア・ゴーゴー」を初披露した。バックダンサー「スレスレガールズ」を従

えてのステージだった。ちなみに「スレスレガールズ」には、サークルの後輩であり後にマネージャーとなるハレンチが所属していた。ちなみにマネージャー・ハレンチは出来ちゃった結婚によって2008年春にマネージャー業を退職。ちなみに「ハレンチ」は本名ではない。

※11：同日のライブのリハ後に磯辺餅を食べたら声が超ハスキーになった。「磯辺餅がガラガラ事件」と呼ばれている。

※12：東京都世田谷区奥沢にある「magic tone studio」のこと。3人が上京して以来、ほとんどの曲は同スタジオで作られている。

※13：2007年秋にNYにて行ったレコーディングのこと。

※14：未発表曲「泣いていいのさ」：ファンの皆さん是非聴いてみてください。

※15：菊住は「○○」だと思う。間違ってるかもしれないけど、的な言い回しをよくする。大胆なのか臆病なのかわからない。

※JUNGLE★LIFEでは今回を含めて17回キャストの記事を掲載（そのうち表紙3回、ゴチバトル2回）。永友の「射撃発言」や「カリビアンコム発言」などを掲載し続けたため、「永友の下ネタ発言が多くなったのは100%JUNGLE★LIFEのせいだ」という温かい声援を読者からいただいたりした。

interview&text：Takeshi.Yamanaka



INTERVIEW #1 とりあえず活動休止の真相に迫ってみた

「僕はキャプストのファンでもあるんです。だからやっぱり解散はしてほしくないし、したくない」

●オフィシャルHPで2/3に活動休止を発表してから20日ほど経ちますが、BBSとかファンからの書き込みもたくさんありますよね。もう自分のち的には整理できてるんですか？

梅田：活動休止を決めたのは発表より前の話で。

●そりゃそうだ【※4】。

永友：去年の下半期はずっとメンバー間でそういう話をして。

梅田：そういう経緯があった上でファンの人たちの反応とかを発表によって改めて感じて。“おっ！”って、“ここまで受けてくれたんだ”っていう。菊住：発表したのを客観的に見て、改めて“俺たち活動休止するんだ”って実感した部分もありました。現実味を帯びたっていうか。

梅田：発表した後に父親から電話があって、もちろん事前に伝えてたんですけど、“改めて書き込み見たら涙が出てきた”って【※5】。

永友：色んな反応を見て素直に嬉しいなって思いました。そういう気持ちがありつつ、いい区切りができたなって。

●個人的なことを言わせていただきますけど、僕はキャプストの活動休止の話を聞いて、ぶっちゃけ受け入れられなかったんですよね。感情的に肯定できないっていうか。僕は仕事柄かも知れないですけど、こういう取材とかはバンドを応援する…未来がある前提でバンドに関わらせていただけっていう意識があって、“自分は応援する立場”という意識が強いっていうか。

永友：うんうん。

●だから活動休止とか解散するっていう話を訊いたら、ものすごく語弊がある言い方もわからないですけど、そのバンドに対して興味が無くなるんです。

永友：いや、わかります。

●でも「キャプストが活動休止する」と聞いたとき、簡単にそう思えなかった。キャプストはデビュー前から毎回取材をさせてもらって、勝手に僕が思ってるんですけど、まさに“長い坂を一気に登ってる”感覚だった。理解できるっていう気持ちもあったけど、腹が立つ部分もあったんです。

梅田：俺は正直なところ、自分のために音楽をやっているとこがあって。自分が楽しいために。でも活動休止を発表して、BBSの書き込みとかでいろいろんなの想いに改めて触れて。“申し訳ない”っていう話でもないんだけど、キャプテンストライダムっていうバンドは俺たちだけじゃなかったんだと思いましたね。

永友：うん。でもそういうことも含めて活動休止にして良かったと思ったよ。キャプストのことを好きでいてくれて、BBSとかにも書き込みしてく

れたような人たち…そういう人たちにに対して100%自信を持って「これだ！」っていう音楽を生み出すことができないと判断したら、それはやっぱり続けるべきじゃないだろうなって。

●あー。

永友：シングル『ブギーナイト・フィーバー』【※6】が活動休止前の最後の作品になるわけですけど、今までの作品に関しては全部いいモノしか作ってないと思って。今回ベスト盤「ベストロリー」をマスタリングして、改めて昔の曲とも聴いたんですけど、全部いいなって思えたんです。

●はい。

永友：シングル『ブギーナイト・フィーバー』を出して、次を作ろうっていうところでメンバー3人でやっててすれ違いがあったりスレがあったりして、なんか“今のままじゃこれまでやってきたことを超えられないな”っていうのがあって。そういう状態で、キャプストを好きでいてくれる人たちにに対して、“キャプテンストライダム”という名前だけでCD買ってもらったりライブに来てもらったりする方が申し訳ない。BBS見て、こういうこと言ってくれる人たちが居るからこそ、万全の状態が出ていった方がいいし、それが出来ないと活動休止しよう。

●好きでいてくれる人たちにに対して誠実ですよ。

永友：うん。だから「活動休止にして良かった」と言ったんです。

●解散ではなく活動休止にしたのは？

永友：別にメンバーの仲が悪くなったわけじゃないし、僕はキャプストのファンでもあるんです。だからやっぱり解散はしてほしくないし、したくない。実際そういう反応は少なかったんですけど、「納得いかない」って言う人の気持ちもわかるんですよ。そもそも好きで音楽を始めて、このメンバーが良くてバンド組んで、勝手に僕らが始めちゃったことで…もちろん“ファンのために”っていう気持ちもあるんだけど…でも活動休止したり解散したりっていうことは、すごいエゴだと思いますよ。

●うん。

永友：でも僕は、永友と梅田と守代司…この3人を出すキャプテンストライダムという音のファンだから、去年ずっとプリプロとかやっていく中で“自分が好きだったキャプテンストライダムの音っていうのとは違ってきてるな”と感じて。だったらもう1回、自分が好きなモノをメンバーがそれとれちゃんと思つて直す時間を設けた方がいいんじゃないかなって。

梅田：あれこれやりたいことが増えていく中で、



今まで本当に色んなことをやってきて。じゃあ今度は“次は何をやりたいか？”みたいに探すようになっていったっていうか。探すようになったということとは、“とにかくこれやろぜ！”ということがパタン！と出てくるような時期ではないんだなと感じたことはあったんです。

永友：目的と手段が逆になるっていうか。“〇〇がやりたいから□□をする”という思考ではなくて、“やりたいことを探すために□□をする”という感じになってたっていうか。

●なるほどね。

永友：プロとしてやってるわけだから、作り方としてはどっちでもいいと思うんですけど、良い作品ができれば。でも僕らはそんな中で摩擦してたっていうか、例えば“やりたいことを探すために□□をする”という方法で作ったとして、みんなを感動させるモノを作ることができるんだろうか？って。

●でももう1回自分の状態を判断し、活動休止という決断を下すのはある意味辛い作業ですよ。

永友：そうですね、うん。でも、活動休止とか解散っていうのはバンドのメンバーしか決められないことですから。いちばん大事なモノだからこそ、それを止めたり無くしたりする責任はメンバーにあるんですよ。ファンの人々の気持ちはわかりますけど、わかりますけど…。

梅田：生ビールひとつ下さい！【※7】

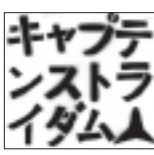
菊住：去年とか時間があつたら色々考えたんですけど、でも今までの活動を振り返ってみて、“こうしたことが間違っていた”みたいな後悔はないんですよ。もちろん知識とか技術レベルでの細かい反省はいっぱいあるんですけど。

●はいはい。

菊住：その時に自分たちがやるベストをやってきたと思うんです。「あの頃の自分に戻たらどう



1st Single
『マウンテン・ア・ゴーゴ』
2003/08/08



1st Album
『ブラックロール』
2003/11/26



2nd Single
『マウンテン・ア・ゴーゴ〜ツ』
2004/11/03



3rd Single
『流石オールナイト』
2005/03/24



4th Single
『キミへ』
2005/10/19



5th Single
『思ひみのシミかな』
2006/01/25